

2014 4/22

No.1969

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



ソメイヨシノやヤマザクラなど約300本の桜が満開を迎えた三溪園（横浜市中区本牧三之谷）で、ライトアップされた夜桜を楽しむ「観桜の夕べ」が3月29日から4月6日まで開かれ、来園者は幻想的な雰囲気を楽しんだ。



政経かながわ

2014 4/22 No.1969

contents

視点・点描	3
共感呼んだ井上家の快挙	
講演録	4
「人を育てる、人に育てられる— 柔道を通して学んだこれからの生き方」 東海大学副学長、神奈川県体育協会会長 山下 泰裕	
政治	8
消費増税で買い控え34% 経済の先行き、なお不安強く	
国際	10
「シェール革命」日本波及へ 国内導入にらみ拠点整備	
対論・座標軸	12
どうする特定秘密保護法 中谷 元氏 大島 敦氏	
くらし2014	14
気分障害からの復職を支援	
広告珍談	16
新聞広告が始まった⑧ 広告新聞も広告	
NNAアジア経済レポート	17
景気データファイル	18

事務局だより

◇横浜定例講演会

2014年5月20日（火）13時
30分～15時

ロイヤルホールヨコハマ5階
「リビエラの間」

講師はみずほ総研経済調査部
長の 矢野 和彦 氏

演題は「消費税増税後の日本
経済、地方経済の行方」(仮題)

視点 点描



共感呼んだ井上家の快拳

神奈川からボクシング界の新星が誕生した。座間市出身の井上尚弥選手(20) Ⅱ大橋ジムⅡが6日、世界ボクシング評議会(WBC)

ライトフライ級タイトルマッチでメキシコ人王者に6回TKO勝ちし、日本選手最速のデビュー6戦目での世界王座奪取を果たした。出身も所属ジムも神奈川だけに、弊紙は1面、スポーツ面、社会面で大展開したが、スポーツ紙

も軒並み1面で報じた。昨今のボクシング界では珍しい扱いになったのは、話題豊富な正統派王者への期待の大きさからだろう。

まず勝ち方が圧巻だった。フットワークを生かした攻撃と鉄壁の防御を誇るが、3回途中で足がつかぬアクシデントに見舞われた。リミットの48・9キまで8キも減量をしたのが響いたわけだが、「打ち合いでの引き出しも持つ



井上家の長男、大橋区総合体育館でガッツポーズの井上尚弥選手(中央)と父の真吾さん(左)。右は大橋会長。奥は母の美穂さん=大田区総合体育館

ていた」と、相手得意の接近戦にも対応。4度の防衛経験がある王者を右ストレートで粉砕した。プロ転向の記者会見で、アマ7冠の逸材を「怪物」と形容した大橋正行会長は、あらためて「まさに怪物だね」とたたえた。最短記録のためには、厳しい

選手がボクシングを始めたきっかけはアマチュアボクサーだった父の真吾さん(42)にあこがれたから。父はトレーナーとして幼いころから指導し、息子の才能を伸ばした。息子のプロ入りと同時に、代表を務める塗装会社を知人に任せ、自分も大橋ジム入りした。母も姉も全面的に協力した。

2歳違いの弟、拓真選手も世界戦の前に、プロ2戦目で世界ランカーに判定勝ちした。ゆくゆくは兄弟世界王者も夢ではない。

有名なボクシング一家はほかにあるが、井上家の快拳は素直に祝福できる。最終目標は「具志堅(用高)さんの記録を塗り替えること」と語る若武者。13度防衛の日本記録を超える壮大な夢に向かって一家の挑戦が始まった。

(神奈川新聞社運動部長

岡部 伸康)

広告新聞も広告

前号のつづき。おかしな題名の新聞はまだまだある。おたのしみ下さい。

確実画解新聞と絵入日曜新聞は、イギリスの新聞《イラストレイテッド・ロンドンニュース》のよう。なまいき新聞や狂画ねごと新聞なんて見る気しないね。こんな流行ってるよと新造新聞、芸妓のうわさ話か客取新聞、もめごとばかりか娯多娯多新聞。雷々珍報、百科新聞、風流新聞。をとめ新聞に子供新聞まで。ほかの新聞のゆかいな記事だけを集めた「新聞種・有の儘」。記事は袋に印刷して、読んだあとは「菓子袋新聞」。ついに広告だけ掲載した「勉強広告新聞」が、1878（明治11）年に発刊された。

報は、88（明治21）年3月から天気予報を掲載した。翌月の東京日日新聞に、「天気予報の掲載なきは新聞紙の一大欠点ともいふべき



いわば共存共栄の時代であった。新聞社の安定した経営は、購読者数を増やすこと。そのため各社は苦勞した。1882（明治15）年3月に創刊した「時事新報」は、1ヵ月間無料進呈のビラをゴム風船につけて飛ばしたり、贈答用の新聞切手（購読券）を発行した。

をもつて、わが社は本年三月以降毎日の紙上に、これを掲載することとなれば、時事新報の購読者は、特に無上の便利をうることなるべし」と時事新報が広告した。つまり東京日日新聞は、競争相手の時事新報の広告を載せたのである。

あった。珍妙な題名といえば、イギリス人ワグマンが横浜で外国人向けに発行するマンガ雑誌《ジャパン・パンチ》をもじった「絵新聞日本地」。「毎月二回出版 此小冊は英人ワクマン氏のポンチに倣ひ、落話の戯画中寓意を含蓄し、内外勲懲に関する諸件を輯め、江湖好事家の看に供す。本月中旬初刊の発売より逐次の購求あらん事を望す。出版編輯者 横浜桜木町七丁目十三番地 仮名垣魯文 売払 同本町六丁目六十五番地 新聞会社」と広告。

鮮明。洋紙は桃色にして目に害なし。国中何れの地に売捌所あり、配付最も手広きゆえ広告を出すには最もよき新聞紙なり。マネたのは「万朝報」に名古屋の「新愛知」もピンク。「浪華新聞」と「東京絵入新聞」は淡い青色で

仮名垣魯文は横浜毎日新聞の記者をしながら、偉才の画家河鍋暁斎とニッポンチを発刊した。富士山をまたいで右が魯文、左が暁斎。新聞会社とは魯文の自宅。（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）「図」「絵新聞日本地」創刊号の表紙・1874（明治7年）6月発刊。3号で廃刊